

論 文

ビアトリス・ポッター（・ウェブ）による マルクスの労働価値説批判

佐藤 公俊¹

¹一般教育科-社会 (Liberal Arts-Social Science, Nagaoka National College of Technology)

On the Critique of Marx's Labour Theory of Value by Beatrice Potter Webb

Kimitoshi SATOH¹

Abstract

In this paper, a research of value theory and a criticism on Marx's labour theory of value by Beatrice Webb in her "Economic Theory of Karl Marx" in 1886 and "On The Nature of Economic Science", appendix D of her *My Apprenticeship* in 1926 are exercised, and the theoretical significance of her conclusions is considered. It can be assumed then that it is very important point that she insists as origin of exchange value, not manual labour of Ricardo and 'homogenous human labour "Congelation of indifferntiated expenditure of vital energy"', abstract labour, of Marx, but the relation of 'human faculties and desire in their various degrees of intensity and in their different variety of form'.

Key Words : Beatrice Webb, Karl Marx, value theory, abstract labour, desire, faculty

1. 課題と従来の研究状況

1. 1 本稿の課題

本稿では、ビアトリス・ポッター・ウェブの価値論研究、および、マルクスなどの労働価値説への彼女の批判について考察する。ビアトリス・ウェブは社会調査家やフェビアン協会のリーダーとして高名である。まず、結婚前のビアトリス・ポッター時代の彼女が1887年作成したが未発表に終わった草稿“Economic Theory of Karl Marx”（「カール・マルクスの経済理論」）¹⁾における上述の論点を検討し、次いで、功なり名遂げた結婚後のビアトリス・ポッター・ウェブが1926年に出版した自伝的評伝 *My Apprenticeship*（『私の徒弟時代』）²⁾に付録で収録された論考“On The Nature of Economic

Science”（「経済科学の本性について」）³⁾における上述の論点を検討して、その意義を考察する。

ビアトリス・ウェブは、*My Apprenticeship*の付録として「経済科学の本性について」（以下「本性」論文）を収録したさい、本文ではそれを書いた状況を示し、自身の日記をもとに解説もしている。1926年の時点において彼女は、「本性」論文が、1887年作成の手書き草稿“Economic Theory of Karl Marx”と1886年作成の手書き草稿“History of English Economics”（「イギリス経済学の歴史」）⁴⁾という、それぞれの「私の論文で不完全なかたちで示された議論を、要約すると同時に拡張」³⁾して書き直したのである。そして、その「本性」論文のなかの「(2) 価値の理論」において、彼女はマルクスやリカードなどの論者の「価値の理論を私が…じ

つくり考え」た結果として、マルクスなどの論者の労働価値説とマルクスの物神性論を批判して、自分の価値論とその意義を述べているのである。

筆者はすでに本稿に関連する他の論考で、ビアトリス・ポッターの“History of English Economics”を翻訳して紹介し⁵⁾⁶⁾、また、1886年の新たな経済学の構想の提起とその方法、同年後半でのその方法の変化を検討した⁷⁾⁸⁾。さらに、本稿では1886年から1887年にかけての彼女の価値論の方向性を1926年の「経済科学の本性について」における価値論と関連させて検討している。こうした青年期の彼女の社会学的経済学の対象・方法・理論・体系性を検討する一連の作業は、熟年ビアトリス・ウェップの集会的で集団の進化論的な社会経済学と福祉国家論の議論を総合した福祉社会体制論の出発点として、青年期のビアトリスの経済学を位置づけることを意味する。それは、彼女の社会経済学形成史の展開を考察する際の必須の課題であり、本稿はこうした彼女の福祉社会体制論の構制と意義を把握してゆく研究の一環をなすものである。

1. 2 ビアトリス・ポッターの経済学研究についての研究状況

1880年代の青年期のビアトリス・ポッターの新たな経済学の構想と方法論は、近年筆者の一連の研究が扱っている他にはほとんど扱われていない。

熟年期のビアトリスの経済学や経済思想の代表的な研究の中には、ビアトリスの*My Apprenticeship*の社会経済学の見解についての、G.D.H.コール⁹⁾とマクブレア¹⁰⁾、および、トムソン&ポーキングホーン¹¹⁾の見解がある。コールが、ビアトリスが亡くなった1943年に追悼した論文で、ビアトリスを正当な経済学者として認めなかったために、彼女の経済学が軽視されてきた面があると考えられる。近年では、トムソンとポーキングホーンが共著でビアトリスを制度派経済学者として認めており、再評価が進んでいるといえる。また、マクブレアはフェビアン協会の政治面の検討で1890年前後のビアトリスの先進性に注目している。

日本では、大前眞¹²⁾、佐藤博樹¹³⁾、江里口拓¹⁴⁾の諸氏が、青年期のビアトリスの経済学研究を検討しているが、主に1926年のビアトリスによる自身の青年期の解説を検討しており、彼女の青年期の経済学研究の状況を確定して、そこからビアトリスが集会的進化的社会経済学と福祉国家論の議論を総合した福祉社会体制論を構成して行った過程は考察されていないのである。

2. ビアトリス・ポッターの1886年の経済理論研究

青年期のビアトリスの経済学研究全般についていえることであるが、「マルクスの経済理論」作成に先行する1886年の経済理論研究とその方法の変化について、先述のように、筆者の研究⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾を除いては、これまでほとんど研究されてこなかったといえる。 「マルクスの経済理論」作成までの重要な背景をなす彼女の研究状況をスケッチしておく。

2. 1 ビアトリス・ポッターの経済理論の新構想

1886年8月までに、ビアトリスはリカードなどのイギリスの古典派経済学を理論的に研究し、手書き草稿「イギリス経済学の歴史」を執筆した。彼女は、そこにおいて、マーシャルがケンブリッジ大学経済学教授への就任講演の「経済学の現状」¹⁵⁾で述べた貨幣タームでの経済現象の把握の方法を参照して、「真の経済科学」を提起したと自負していた。そこで彼女は、つながる人間関係を社会的本質とし、その人間関係における欲望と能力が結合して経済的な欲望と能力となり、それらのつながる関係が交換価値関係に現れるとして、三層の社会関係を対象として設定する。そして、彼女はこれらの経済現象を①心理的②物質的③心理的／物質的の三面で表現することを目指す価値の経済理論の新構想を提起したのである。

ビアトリスの考えた三層の社会関係は、個人間の経済的な欲望と経済的能力のつながりの関係が交換価値関係として現象し、それが貨幣で表示されるということである。それは、個人間の結合関係という社会的本質が経済に現象することで、社会に対して部分的な経済領域の特殊な経済関係が社会全体を規定するという構想である。彼女の「イギリス経済学の歴史」における社会学的経済学についての新たな方法の提案と、こうした個人間の欲望と能力の結合関係が経済的に現象する三層の社会関係の考察は、1887年の「カール・マルクスの経済理論」における非労働主義的な形態的価値論を基礎づけるのである。

2. 2 ビアトリス・ポッターの経済理論の方法

こうしたビアトリスの社会学的経済学は、コントの社会学と彼女が参照したマーシャルの「経済学の現状」の経済学と社会学の領域区分において共通するといえる。しかしながら、彼女の経済理論の方法は、この時点では演繹的であるが、マーシャルの演繹法的オルガノンとは、対象も方法も異なる。マー

シャルは、時代に先行して、歴史的現実を意味付ける分析の枠組みを意図して、コント的な原理的な人間関係の本質の経済表現から、市場と外部の関係で市場経済と他の経済を同一次元でとらえる社会科学の経済学に移行していったのである。しかし、「イギリス経済学の歴史」ではビアトリスは、コントの人間関係の社会的本質の経済表現という、社会学原理からの演繹の方法を採用してはいるが、彼女の領域設定は、マーシャルの市場と外部の関係性の設定に倣ってはいないし、また、理論による現実の意味付けの視点は有していない。総じて、この時点での彼女は折衷的な立場に立っているものであり、社会科学の実証主義への移行の過程に在るといってよい。しかし、彼女がその指揮と指導の下で社会調査をしたロンドン社会研究者のチャールズ・ブースやその他の友人たちから、この論考をく寝かせて熟成させるべきとの趣旨の書簡があり、彼女はその意見に従い公表を控えたのである。

2. 3 ビアトリス・ポッターの理論的自立

ビアトリス・ポッターは、メンターとしての家庭教師でありまた社会哲学の恩師であるハーバート・スペンサーにも「イギリス経済学の歴史」の草稿の要約を送った。ただ、それについての、恩師から批判に対しては、彼女は猛烈に反発し恩師を批判して、新たな社会理論の立場に移行したのである。

ビアトリスは「イギリス経済学の歴史」に対する、スペンサーからの真っ向から批判に対し、日記に「H.S. (ハーバート・スペンサー) は歴史的感覚がない」¹⁶⁾と書いてその理由を述べたが、師には提出しなかった「反論」があり、それと師からの批判の手紙とを合わせると1886年10月に隠された「論争」が行われたのである。その意味をみると、ビアトリスは、師への反論を書いたことを大きな転機として、イギリスの自由放任主義にもとづく古典派政治経済学に依拠した社会学的経済学から、イギリスの新古典派経済学を参照する社会科学的政策論と集団的社会進化論の立場へ移行していった。ビアトリスのこうした進化主義の方法の経済学への採用以外にも、社会学的経済学として市場外領域への展開も忘れてはならない。スペンサーの批判に反論することで、ビアトリスは「社会学的経済学」によって、進化主義と社会科学で政策論的な社会病理学を展開し、それ以前から形成してきた実証主義的経済研究者としての専門性により、スペンサーから自立していった。ビアトリスは見えざる「論争」を行って、恩師に対してくハーバート・スペンサーは歴史的感覚が

ない」という「独立宣言」を日記に書いて、経済学研究者として自立していったのである。

2. 4 青年期のビアトリス・ポッターの経済学

以上のように、ビアトリスの1886年における方法の変化は、筆者が別稿で論じたように⁸⁾、スペンサーとの「論争」で、本質現象論から個人主義的に各社会領域間の現象の関係を論ずる社会科学的方法の政策論に移行したことである。それは、彼女のその後の集合主義的に各社会領域間の現象を扱う社会経済学の出発点となり、また、後の彼女の20世紀の集会的で、集団の内部と集団同士の進化を扱う、男女平等的な福祉社会経済学と福祉国家体制論へと展開したのである。

ビアトリスは青年期に経済理論研究者としてのアイデンティティを形成したが、壮年期にはパートナーのシドニー・ウエップとともにナショナル・ミニマムを基準とする福祉国家政策体系を構成し、それを社会運動として英国内に広く喧伝した。さらに彼女は、1910年代以降の熟年期に賃金政策と福祉政策にフェミニズムを取り入れた。彼女は、シドニーとともに産業民主主義と政治的民主主義の両面を有する民主主義社会体制論をフェビアン協会内で制度的に構成して、自身の経済学研究を集大成した集団の集会的かつ進化的な社会経済学と合わせて、社会民主主義体系といえる福祉経済体制論を構築していったのである。

3. 1887年のビアトリス・ポッターのマルクス価値論の把握と批判

3. 1 ビアトリス・ポッターの価値論研究

1880年代のビアトリスの経済理論研究のうち、「カール・マルクスの経済理論」における価値論研究の展開は3. 2以下のように把握することができる。その理論的意義の概要は、彼女が経済理論の原理的展開を突き詰めて考察したこと、および、マルクス価値論の発展的な把握である価値の形態の三層構造論に通ずる、価値実体論の形態性の提起を行ったことである。その後の社会研究と経済学研究で、彼女こうした自説の理論的意義を十分に論証することをしておらず、また、経済学の原理を体系的に展開したわけではなかった。しかし、こうした価値論の把握が彼女の社会経済学、および、福祉国家体制研究の重要な背景となっていたのは事実である。

3. 2 「カール・マルクスの経済理論」におけるマルクス価値論の把握と批判

ビアトリスは、1887年作成の「カール・マルクスの経済理論」¹⁾で、「大陸の労働者階級のバイブル」であるマルクスの『資本論』における「社会主義の科学的基礎」を検討しようとしている。(以下では、例えば(5:74)で、「カール・マルクスの経済理論」の第5草稿であり、第1草稿から第5草稿までの草稿全体を通した草稿の束で、最初から第74枚目の用紙からの引用を示している。)

「英国の公衆は、今年の初めに出版されたカール・マルクスの『『資本論』資本家的生産の批判的分析』の翻訳が、社会主義の文献の標準的な作品であると紹介された。我々は、この作品が『大陸の労働者階級のバイブル』であるばかりか、社会主義の科学的基礎であることを見出すであろうと聞いている。」

(5:74)

ビアトリスが『資本論』の価値論を検討するのは、このように「社会主義の科学的基礎」が、『資本論』の「価値論とその系論である資本形成の理論とにおかれている」からであり、マルクスの「商品の価値の分析は彼の経済学説の基盤」であるからである。

「私が検討すべきと提案する社会主義の科学的基礎は、価値論とその系論である資本形成の理論とにおかれている。カール・マルクスは、彼の研究を(社会の現在の資本主義状態における)富を、『膨大な富の蓄積』と定義することから始めている。商品の価値の分析は彼の経済学説の基盤なのである。」

(5:74)

以下では、彼女が分析して把握したマルクスの価値論の論点を次の3点に絞って検討することにし、物神性論は別の機会に検討する。その際、マルクスとは異なる彼女自身の価値論の方向性がどう論じられているか注目する。

- ・商品に「等置」する際の単位とは何であろうか。
- ・「通約可能性」とは何であろうか。
- ・交換価値の形成から有用性をもたらす物的性質を排除し、「等量の同じような単位」を基礎とするこの意味は何であろうか。

3. 3 商品に「等置」する際の単位とは何であろうか

ビアトリスは「カール・マルクスの経済理論」で、

まず、マルクスの議論での商品の交換可能性、および、交換価値と使用価値との二重性を次のように規定する。

「有用な対象が、商品になるためには、他の対象と交換可能でなければならない。その時、商品の第2の本性はその交換価値、または、マルクスが好んで定義するように、その価値である。この性格を有することで、一つの商品の一定量は他の商品の一定量と交換されるのである、すなわち、2ポンドの肉が1ヤールのリンネルと交換されるというように。」

(5:76)

ビアトリスによると、マルクスの議論で「2ポンドの肉が1ヤールのリンネルと交換される」のは、両者が商品であるからである。この商品は「他の対象と交換可能」で、その時そうした商品の「第2の本性はその交換価値、または、…その価値で」、そうした「性格を有することで、一つの商品の一定量は他の商品の一定量と交換される」のである。ただし、これだけでは商品として交換可能だから交換され、交換されるのは商品であるから、という循環論法なのでもう少し整理して把握しよう。

ここでは、ビアトリスは、商品に「交換可能」の評価、ないし、「交換価値」、あるいはマルクスのいう「価値」の性格があることで、「一つの商品の一定量は他の商品の一定量と交換される」としている。ビアトリスは、こうした交換の前提として、「われわれ」商品所有者が、使用価値が全く異なる2商品を、ある共通性によって等式とし、つまり「2ポンドの肉=1ヤールのリンネル」を成立させ、2商品を等値しているという。

「それゆえ、われわれはそれぞれの使用価値が全く異なる2商品を等式に等置したのである。すなわち、2ポンドの肉=1ヤールのリンネルと。しかし、そこには通約可能性を除いて、何の等価もありえないのであって、異なるものの多さは、これらのものの多さが同じ単位のタームで表わされるときにのみ、量的に比較できるのである。」(5:76)

彼女は、マルクスによって、「異なるものの多さ」を「量的に比較できる」は「同じ単位のタームで表わされるとき」なので、「通約可能性」の他に「何の等価も」ないが、それによって「等価」として「2商品を等式に等置」できると、把握している。では、この「通約可能性」とはなんであろうか。

3. 4 「通約可能性」とは何であろうか

ビアトリスは、「全ての商品に共通する、別の唯一の性格」を「生産に支出された労働力」として検出する。

「その時、その存在によって、二つの商品、例えば肉とリンネルを、等式に等置しようとした尺度の単位を我々はどこに見出すであろうか。決して同じではない、肉とリンネルの物的性質のなかにはない。また、肉とリンネルがそれぞれ満たす、性質も源泉も異なる人間の要求のなかにもない。それゆえ、我々は（肉にもリンネルにも）全ての商品に共通する、別の唯一の性格に導かれる。すなわち、それらが全て人間労働によって生産されているという事実である。かくして、その存在によって商品が等式を可能にするところの共通の単位は、それらの生産に支出された労働力である。」（5：77）

彼女によると「二つの商品、例えば肉とリンネルを、等式に等置しようとした尺度の単位」は「物的性質のなかにはない」、「性質も源泉も異なる人間の要求のなかにもない」。それは「全ての商品に共通する、別の唯一の性格」、「すなわち、それらが全て人間労働によって生産されているという事実」である。かくして、「商品が等式を可能にするところの共通の単位は、それらの生産に支出された労働力である」と彼女は言う。

ビアトリスはこうして、「通約可能性」、ないし、「共通の単位」を「生産に支出された労働力」と把握すれば、「労働力が価値の源泉」となると結論する。次に彼女は、そうした等式を成立させる労働価値説を、マルクスとリカード派に共通する議論として批判する。彼女は、「労働力が価値の源泉」であるという結論は、「商品の交換価値がその生産に支出された労働力から発生するという、リカード派の学説である」といい、リカードのこの命題には「逆説的結果」があると批判する。その原因は「労働というタームの不明瞭な使用による」というのである。

「『労働力が価値の源泉である。』単独で取り上げられるこの結論は、単に、商品の交換価値がその生産に支出された労働力から発生するという、リカード派の学説である。…この逆説的な結果は、労働というタームの不明瞭な使用によるのである。…リカードと追隨者が労働というタームを肉体労働を示すものとして用いて、雇用者と産業の組織者の頭脳労働

を商品の価値の要素としてはすべて無視したためなのである。彼らは雇用者と交易者を単に資本家として扱った。彼らは、一方で、肉体労働と機械設備の組織と制御に現われる、他方で、生産された財への市場がそれにより形成される場所のコミュニティの必要なものについての必須な知識に現われる、経済活動のこれらの形を無視したのである。」（5：77-78）

ビアトリスはリカード派の労働価値説を以上のように批判する。大筋では、リカードとマルクスに共通するこうした価値説は「肉体労働」価値説にとどまり、頭脳労働や「生産された財への市場がそれにより形成される場所のコミュニティの必要なものについての必須な知識」など様々な労働や活動や知識を無視していると、彼女は批判しているのである。

ビアトリスによると、リカード派の上のような誤りの実践的・論理的帰結は当時認識されずに、「あらゆる種類の労働の経済的平等を主張する、社会主義」の立場から、マルクスがそれを継承して、「こうした不正を導入して、そのために素晴らしい論理的メカニズムを提供」したと、彼女は分析する。

「この誤りの実践的な、また、論理的な帰結は、すべてのものの全面的な私的財産が天賦の権利とされていた時代には認識されなかったのである。しかし、直接の豊かさ、議論の余地のない私的財産の必要性、そして、個人の経済的価値に従って、この世界のよきものの所有を再調整する試み、特殊な形態の活動の比較的な有効性を見逃すことは大きな不正となる。カール・マルクスは、しかしながら、こうした不正を導入して、そのために素晴らしい論理的メカニズムを提供するのである。すなわち、われわれが彼の価値の分析の現実性を許すならば、彼は、あらゆる種類の労働の経済的平等を主張する、社会主義の中心的な地位を獲得するのである。」（5：78-79）

ビアトリスは、マルクスの議論では「商品が有用となる物的性質が交換価値の形成から排除され」、交換価値が「等量の同じような単位を一定の基礎」としているとする。

「読者は、この分析の末尾の要約に従えば、その性格によって商品が有用となる物的性質が交換価値の形成から排除されていたことが、わかったであろう。交換価値は我々が著者によれば、等量の同様な単位を一定の基礎にしているのである。」（5：79）

3. 5 交換価値の形成から有用性をもたらす物的性質を排除し、「等量の同じような単位」を基礎とすることの意味は何であろうか

ビアトリスは交換価値の尺度単位について、「交換価値の一つの尺度単位が労働力である」ことを認めるとき、「明らかにこの労働力は抽象的労働であって、何らかの具体的形態の労働ではない」という。彼女は、交換価値の形成から物的性質を排除する理由を、マルクスに従って、それを「何らかの具体的形態の労働」ではなく「抽象的労働」に求めている。

「商品がそれにより様々な人間の欲望を満足させる場所の様々な物的性質が影響することは、決してないのである。それは数量を扱い質を無視するのである。パーボンが言うように、『十分な量であるときに限り、一つの種類の要望は別の要望と同様に良いものである。』今、我々が、交換価値の一つの尺度単位が労働力であることを認めるならば、明らかにこの労働力は抽象的労働であって、何らかの具体的形態の労働ではないに違いないのである。」(5: 79-80)

ビアトリスは、「分析の法則」に従って、「我々が全体の統一性を維持しようと望むならば、我々が生産物から差し引くものは、また、それを生産する工場から差し引かれるに違いない。そこから、我々が交換価値を構成する労働力から全ての質的相違を排除するに違いない」と述べて、「我々は織師や、裁縫師や肉屋の仕事の代わりに、時間の継続で測られる抽象的労働を有し、また、その測定標準が週・日・時間であることを見いだす」という。ビアトリスは、「カール・マルクスの言葉」によって、「共通の性質」に還元されたものとして「抽象的労働」をとらえる。

「カール・マルクスの言葉では、『一般的価値形態は全ての種類の実際の労働の人間労働一般であるということ、人間労働の支出であるということ、という共通の性質への還元である。』かくして、その継続時間で測られた抽象的労働が価値の源泉である。」(5: 80-81)

マルクスの「一般的価値形態は全ての種類の実際の労働の人間労働一般であるということ、人間労働の支出であるということ、という共通の性質への還元である」という言葉によって、彼女は「全ての種類の実際の労働」を「人間労働一般」、ないし、「人

間労働の支出」という共通の性質に「還元」したもののとして「等量の同じような単位」をとらえる。

かくして、マルクスの議論においては「その継続時間で測られた抽象的労働が価値の源泉」であるとして、「抽象的労働」と「継続時間で測られた抽象的労働」とを価値の源泉と価値の量規定をなすものと彼女は把握するのである。

しかしながら、ビアトリスは、価値の源泉としてマルクスのいうところの「均質な人間労働『生命エネルギーの無差別な支出の凝固』」、つまり、「抽象的労働」を扱うことは、次にいうように「我々が現実世界を離れて、形而上学的全体性と言う崇高な雰囲気には昇ること」であって、それは価値ないし交換価値の源泉としては「説得」力がないと批判する。

「我々は、生産物から全ての物的性質を、そして、生産者から全ての人間的性格を取り除かなかつたであろうか。それは怠惰と愚かさという人間的性格ではない。そのとき我々はいかにしてあなたに以下のことを説得できるか。すなわち、我々が現実世界を離れて、形而上学的全体性と言う崇高な雰囲気には昇ることを、また、我々が様々な程度の強度と様々に変化する形態での人間の能力と欲望でなくて、均質な人間労働『生命エネルギーの無差別な支出の凝固』を扱っているということ、である。」(5: 81)

彼女は自説の方向性を「様々な程度の強度と様々に変化する形態での人間の能力と欲望」を価値の源泉として扱うことが説得的な議論であると強調しているのである。

3. 6 ビアトリスの方向性

以上のように、ビアトリスは、「均質な人間労働『生命エネルギーの無差別な支出の凝固』」、つまり、生理的な同質性としての抽象的労働を交換価値の源泉として扱うことは、「形而上学的全体性と言う崇高な雰囲気」であって「現実世界を離れて」いて説得力がないといい、交換価値の源泉として「様々な程度の強度と様々に変化する形態での人間の能力と欲望」を検討することが説得的であると主張する。それでは、この自説は具体的にはどのようなものであろうか。「カール・マルクスの経済理論」ではまだ明確に書かれていない。彼女は40年後の「本性」論文で一定の回答を与えている。そこにおける彼女の自説を次に検討しよう。

4. 1926年のビアトリス・ウエップのマルクス価値論批判

4. 1 「経済科学の本性について」

『私の徒弟時代』²⁾の付録の「経済科学の本性について」³⁾（以下では「本性」論文）は、彼女が二つの手書き草稿のテーマを、その後の自身の推し進めた集合主義的で集団の進化的な社会経済学という観点から書き直した再検討論文で、体系的な叙述ではないが、「イギリス経済学の歴史」に示された青年期の彼女の社会学的経済学という出発点の熟年期の到達点を示すものである。本節では彼女が1887年の「カール・マルクスの経済理論」でのべた自説、交換価値の源泉に「様々な程度の強度と様々なに変化する形態での人間の能力と欲望」を位置づけて論じることについて、「本性」論文でそれを彼女がどう展開したか検討をする。ただし、40年を隔てて彼女が物神性批判をどう展開したかの問題についてはここでは取り上げず、別稿で論じることとする。

ビアトリス・ウエップは、「本性」論文の「(2) 価値の理論」の中で、自説として「経済的能力と経済的欲望との一致ないし結合とから交換価値が帰結するというアイデア」で価値の生成と価格を規定する。また、次のようにそのアイデアと協同組合と労働組合の結合理論との類似性を述べ、価値論の現実的意義を期待している。「消費者と生産者との協同作業としての民主的な産業政府というこのアイデアが、経済的能力と経済的欲望との一致ないし結合とから交換価値が帰結するというアイデアと何らかの類似性を持つ」のは、「空想的な」ことではなかろう、と期待するのである²⁾。実際、彼女は「消費者と生産者との協同作業としての民主的な産業政府というこのアイデア」について、1892年8月15日 Tynemouth での労働組合の役員と協同組合員の会議で以下の旨の文書を読み上げたのである。「双方とも共通の目的—協同組合国家—を確立するために、心から力を合わせる」点で、「労働組合と協同組合との適切な関係は理想的な結婚の関係である」²⁾と。当時のビアトリスが国家体制を論じる目的は「協同組合国家」を確立することであった。

こうした議論を背景に、ビアトリスの交換価値の源泉論について確認すべき論点はこうなる。

- ・「経済的能力と経済的欲望」とが「結合することに同意」する条件
- ・交換に「同意して交換価値を発生させるときの等式」

- ・「等式」の内実と「労働」との関係

本節で以下、これらの問題について検討して、成熟した彼女の見解を考察しよう。「本性」論文の主な部分の翻訳とその解説については拙稿「ビアトリス・ポッター・ウエップ『経済科学の本性について』の紹介と翻訳」¹⁾を参照されたい。

4. 2 「経済的能力と経済的欲望」とが「結合することに同意」する条件は何か

ビアトリスは、「本性」論文の、「(2) 価値の理論」の冒頭で、「経済的能力」と「経済的欲望」との「結合」から「交換価値」の生成を説くが、その中で「使用価値」と「交換価値」の関係を次のように述べている。

「価値の理論を私が抱え込んでじっくり考えると、能力を実行することで欲望を満足させることから価値が生ずる、という考え方にいたる。『使用価値』において、実行と満足とのこの結合は、一人の人が自分で生産する食料を食べる際に、一箇の個人において生じるであろう。『交換価値』においては、この結合は必然的に二人以上の個々人の間の関係を意味するのである。」³⁾

また、「能力を実行する」個人と「欲望を満足させる」個人とが別々の二人以上の関係でも、この「実行と満足との」個々人の人間関係的「結合」による「使用価値」の実現がある。二人以上の関係での「使用価値」の引き渡しによるその実現は、彼女の「交換」の想定に加えて、交換ではない、贈与、互酬の一環、略奪、再分配などの原理による使用価値の一方通行の個人間の移転関係でも生ずる。ただし、彼女の「交換」の想定では、二人以上の関係のなかで、複数の個人が相互に使用価値を引き渡す交換関係において交換価値が生成することになる。

それでは、相互の「使用価値」の引き渡しと実現を伴う交換関係で、「交換価値」の生成はいかにして行われるか。

ビアトリスは、交換価値の生成と等式と価格の規定を次のように書いている。

「価格は、所与の能力と所与の欲望とが、所与の条件下で、結合することに同意して交換価値を発生させるときの等式の、貨幣タームでの単なる表現である。それは、いわば、経済生活の結婚的解決であり、多くの他の結婚の取り決めのように、常には、当事

者双方の利益となるわけではない。そして更に、この涙の谷間では多くの能力と多くの欲望とが、事実の問題として、結婚・結合しないまま残っており、かくして交換価値を発生させることはないのである。実際、人類の経済的能力と経済的欲望との常に増大する結婚・結合の流れにおいて、間断のない連続性と相互の満足とを成し遂げる最大の手段をもたらすことが、応用社会学の主要課題の一つでなければならないのである。」³⁾

ここでビアトリスは、「価格は、所与の能力と所与の欲望とが、所与の条件下で、結合することに同意して交換価値を発生させるときの等式の、貨幣タームでの単なる表現である」といい、結合関係と交換価値の発生と貨幣タームの価格表現関係の三層に言及している。ただし、その結合の事態は「常には、当事者双方の利益となるわけではない」し、一部の結合があっても「多くの能力と多くの欲望とが…結婚・結合しないまま残っており、かくして交換価値を発生させることはない」。しかしながら、人類社会的には、こうした「人類の経済的能力と経済的欲望との常に増大する結婚・結合」の「間断のない連続性と相互の満足とを成し遂げる最大の手段をもたらすことが、応用社会学の主要課題」なのである。

ビアトリスは、1926年当時の、社会的に影響のある立場から、対象のかなり複雑な状態を簡略にのべているので、こうした商品の価値関係の三層の形態的關係とその意義づけがわかりづらい。それをときほぐして、言葉を補ってその意義を把握してゆこう。

まず、「交換価値」を発生させる「所与の能力と所与の欲望とが…結合する」「所与の条件」を考慮しなければならない。そのために、それぞれ「所与の能力と所与の欲望」を有して、交換を指向するAとBの二者の想定しなければならない。こうした二者が、自分の「所与の欲望」の実現のために自分の「所与の能力」の成果をもって交渉するのである。

次に、「交換価値」を交換力ないし、交換可能性とすれば、AとBとに所有される「所与の欲望」を実現する「所与の能力」の成果に、他の「所与の能力」の成果への「交換価値」が発生することを両者が認めて、「所与の能力」の成果の所有が交換力ないし、交換可能性、すなわち「交換価値」を社会的に持つことになる。両者の「所与の能力」の成果同士が「交換価値」、交換力ないし、交換可能性をもち、そしてそれぞれの一方の「所与の能力」の成果と他方の「所与の欲望」の結合が双方で期待された

とき、双方の「所与の能力」の成果を交換することが合意され、つまり、それらの成果同士が、両者の想定で等しいものとして対置され、いわば等値され、相互譲渡の合意が成立して、それらの交換が実現するのである。

そして交換の結果、AとBとのそれぞれの「所与の能力」の成果が相手の「所与の欲望」と結合して、使用価値が実現する。このとき、ビアトリスによれば、世の中の結婚と同じく、この交換は「常には、当事者双方の利益となるわけではない」のである。AとBとのそれぞれの「所与の能力」の成果は、「結合」による交換価値として定性的に等しいものとして対置・等値はされたが、定量的に何らかの基準で等価とは、証明されていない訳である。

ビアトリスの上の例を、「所与の能力と所与の欲望」の所有者をAとBとして分析すると、AとBがそれぞれ「結合」を求めて探索し、交渉することにおいて、おそらく偶然に、双方の「所与の能力と所与の欲望」の結合が双方で期待されたとき、双方で「結合することに同意」するが、そのことが一方ないし双方の「所与の能力」の成果に、交換能力ないし交換可能性、つまり「交換価値を発生させる」のである。この交換は「常には、当事者双方の利益となるわけではない」が、ともかく交換だけはなされるのである。

ビアトリスが、当事者の希望が実現しない「涙の谷間では多くの能力と多くの欲望とが、事実の問題として、結婚・結合しないまま残っており、かくして交換価値を発生させることはない」というように、「結合することに同意」が成立するは、何らかの事情からの評価の一致によることといえるであろう。そして、この「交換価値を発生」させての「結合」は、Aの所与の能力の成果とBの所与の欲望、および、Bの所与の能力の成果とAの所与の欲望との双方の「結合」である。ともあれ、こうしたAとBとの片方ないし双方の、所与の能力の成果に交換ないし「交換価値」が発生することは、ビアトリスによれば「経済生活の結婚的解決であり、多くの他の結婚の取り決めのように、常には、当事者双方の利益となるわけではない」のである。

能力と欲望との「結合」自体については、ビアトリスは社会的必然として位置づけている。というのは、この「結合」が「応用社会学の主要課題の一つ」、⁴⁾「人類の経済的能力と経済的欲望との常に増大する結婚・結合の流れにおいて、間断のない連続性と相互の満足とを成し遂げる最大の手段をもたらすこと」であるからである。

4. 3 交換に「同意して交換価値を発生させるときの等式」はどのようなものか

ビアトリスの「所与の条件」から交換に至る過程は上のように考察できよう。そのとき「価格」については、彼女によれば、こうした「所与の条件下で」「所与の能力と所与の欲望とが…結合することに同意して」いる状態において、「等式」が成立し「交換価値を発生させる」ことが基礎的關係であり、「価格」はその「等式」の「貨幣タームでの単なる表現である」といように、三層の關係なのである。

上述のように、AとBとの「経済生活の結婚的解決」が「当事者双方の利益となるわけではない」ということであれば、「双方の利益」が一方では無い場合やマイナスの場合、「等式」とはいえない。

「双方の利益」があるとしても、「等式」はどのような状況で成立するのであろうか。交換は、「双方の利益」が物的・意識的・社会關係的に何らかの側面で存在することが期待される場合なされるであろう。したがって、まず、物的・意識的・社会關係的に総合して「双方の利益」がともにゼロないしマイナスの場合は、ゼロやマイナスの「等式」が成立しても交換を成立させる合意はなされないであろう。

このとき「交換価値を発生させるとき」の「等式」はどのようなものであろうか。つまり、「所与の条件下で」「所与の能力と所与の欲望とが…結合することに同意して」いる状態において、「等式」が成立する場合、双方の「所与の能力」の成果が相手の「所与の欲望」との關係で、質的に、あるいは定性的に等値されるといってよいが、そのとき双方で等しいとされる共通のもので、基準となるものがあるであろうか、あるとするとそれは何であろうか。共通なものがあるとする場合「所与の能力」の成果と「所与の欲望」の「結合」によって生ずる、交換可能性や「交換価値」同士があるという点では定性的に共通する。経済的能力や経済的欲望の結合の現象關係であろうか。その「交換価値」が、定量的に何らかの基準により「等式」として成立するのであろうか。それとも、自分の「所与の能力」の成果を「自分の所与の欲望」を満足させる他の「所与の能力」の成果で示すというような、他の次元で表現形式の「等式」なのであろうか。

4. 4 「等式」の内実と「労働」との關係はどういうものか

ビアトリスは、自身の付した（注6）で、マルクスが、商品に「体化」された労働、ないし、「凝固」した労働時間、あるいは「商品の生産に必要な労働

時間」が価値を生成させ、価値の大きさを決定すると規定していると、解釈している。

「（注6）：それゆえに、等量の労働が体化されているような、あるいは同じ時間で生産できる商品は同じ価値を持つ。一方の商品の生産に必要な労働時間が他方の商品の生産に必要な労働時間に一致する場合、一方の価値は他方の価値に一致する。『価値として、全ての商品は、一定の大きさの凝固した労働時間にすぎない。』」³⁾

ビアトリスは、マルクス派が「第三のもの（交換価値）を作り出すのに第二のもの（欲望）を用いるのを認めることを拒否し」「経済能力、あるいは、彼が好んでいうように、『労働』、は価値の単一の源泉」とすることを批判して、この問題について、価値の源泉論として第一のもの（能力、労働）だけでなく第二のもの（欲望）を用いる必要性を述べている。

「今、カール・マルクスと彼の学徒は、トンプソンやホジスキンのリカードに従って、第三のもの（交換価値）を作り出すのに第二のもの（欲望）を用いるのを認めることを拒否した。彼の価値の理論に従うと、経済能力、あるいは、彼が好んでいう『労働』、は価値の単一の源泉である。彼は、経済的欲望が、エーテルのように、いつでも存在し、それゆえに価値の共通の親としては無視されうると考えたのである。（注6）したがって、彼は、特定の能力と特定の欲望との一致ないし結合を実際に達成する、全ての過程を見逃してしまったのである。」³⁾

ビアトリスは、「カール・マルクスと彼の学徒」が「経済的欲望が、エーテルのように、いつでも存在し、それゆえに価値の共通の親としては無視されうると考え」たので、「トンプソンやホジスキンのリカード」に従い、彼らが「価値として、全ての商品は一定の大きさの凝固した労働時間にすぎない」と規定して、「特定の能力と特定の欲望との一致ないし結合を実際に達成する、全ての過程を見逃してしまった」と批判する。彼女は「エーテルのように、いつでも存在」する「経済的欲望が」「価値の共通の親として」重視されなければならないことを強調するのである。

ビアトリスは、このようにマルクスと弟子たちが価値源泉を「経済能力、あるいは、…労働」のみで規定し、「第三のもの（交換価値）を作り出すのに第二のもの（欲望）を用いるのを認めることを拒否し

た」として、「カール・マルクスと彼の学徒」の（抽象的）労働価値説、ないし、労働だけからの価値源泉論を批判するのである。ビアトリスは、価値の源泉ないし価値の実体は、マルクスの規定する「商品の生産に必要な労働時間」で、「労働が体化されている」商品の「一定の大きさの凝固した労働時間」、つまり「抽象的労働」と解した経済的能力だけでは一方的であると批判する。価値の源泉は「経済能力」ばかりでなくてそれと「経済的欲望」の「結合」関係であると彼女は主張するのである。

4. 5 熟年期のビアトリスの「社会経済学」

以上の「経済科学の本性について」の価値論を位置付けるものは熟年期のビアトリスの福祉経済学の基礎の「社会経済学」である。それは、進化する社会有機体の社会病理を対象にしていた。1926年のビアトリスの「本性論文」における主要論点は、トムソンとポーキングホーンによると、そこにおける「社会学的経済学」が、「経済学を」「何らかの想定された成熟段階にあるとするのではなく、胎児から死体までの社会組織体の成長過程の全ての変化する局面、各々の健康状態や異常、言い換えれば、実際の社会関係の誕生、疾患、死に対象があるとする」ような、「進化する有機体」が集合関係を有して社会を構成すると想定する状況の研究なのである¹¹⁾。彼女たちは「かくして社会の疾患はこの研究分野のもっとも興味深い分野に成りうる」し、社会病理、おそらく貧困という「社会の疾患はこの研究分野のもっとも興味深い分野」¹¹⁾となるという。つまり、資本主義社会は本質的に貧困という疾患を生み出す組織体から構成され、貧困を産出する論理があるものとして、研究されなければならないのである。

1926年の「本性」論文における彼女の社会経済学の論点の意義を確認しておこう。この「本性」論文が示す新たな論点は、集合関係ないし制度の進化を説く社会経済学の提起で、それがもし1880年代に主張されていれば、おそらく経済学研究史上初めて、「家族、消費者組合、様々な種類の生産者の職業組織、地方政府、国家（ないし政治組織）、国際関係」²⁾などの、生活組織、福祉経済組織及びその他の社会経済組織を設定して制度的方法を適用し、それら有機体が織りなす社会の歴史性、ないし、集合的進化というアイディアを示したと評価できるものである。こうして、「本性」論文では再検討された価値論、および、新たな論点の考察がビアトリスの「本質的な独創性」を示しているのである。

5. ビアトリス・ポッターの価値論研究の意義

若きビアトリス・ポッターの価値論研究の理論的意義は以下のように把握できる。

ビアトリスは、1887年の「カール・マルクス」では、「均質な人間労働『生命エネルギーの無差別な支出の凝固』」、つまり、生理的な同質性としての抽象的労働を交換価値の源泉とすることは、「形而上学的全体性と言う崇高な雰囲気」にあって「現実世界を離れ」ることであって説得的でないといい、労働だけの価値源泉論を、肉体労働のみの価値説として退け、交換価値の源泉として「様々な程度の強度と様々なに変化する形態での人間の能力と欲望」のを論ずることが正当であると主張したのである。

ビアトリスは40年後の1926年の「本性」論文では、先に見たようにマルクスと弟子たちが価値源泉を「経済能力、あるいは、…労働」のみで規定し、「第三のもの（交換価値）を作り出すのに第二のもの（欲望）を用いるのを認めることを拒否した」として、「カール・マルクスと彼の学徒」の（抽象的）労働価値説、ないし、労働だけからの価値源泉論を批判した。彼女は、価値の源泉ないし価値の実体は、マルクスの規定する生理的な「抽象的労働」と解した経済的能力だけでは一方的であると批判する。価値の源泉は「経済能力」ばかりでなくてそれと「経済的欲望」の「結合」関係であると彼女は主張したのである。彼女は、普遍的に存在する「エーテルのように、いつでも存在」する「経済的欲望が」「経済能力」と共に「価値の共通の親として」重視されなければならない、価値の源泉が「経済能力」と「経済的欲望」の「結合」関係であるという。それは、生産関係から独立の商品形態の価値の生成構造を解明する形態的三層構造論の実体論の構制につながるものである。

若きビアトリスの経済学について暫定的な結論として、本稿の第2節で見たように、彼女は、1886年の「イギリス経済学の歴史」では、個別化された個人そのものでなく、つながる人間関係を社会的本質とし、個人間の欲望と能力のつながりが経済的な欲望と能力の関係として現れ、その交換価値関係が貨幣で表示されるとして、三層の社会関係を提起したのである。それは、個人間の欲望と能力の結合関係という社会的本質が交換価値の関係に現象する関係であり、その交換価値関係の表現関係が貨幣であるという観点である。彼女の「イギリス経済学の歴史」におけるこうした社会学的経済学の新たな見解

と、個人間の欲望と能力の結合関係という社会的本質が交換価値ないし価値に現象するという、非労働主義的価値関係の考察は、1887年の「カール・マルクスの経済理論」における商品の形態的価値関係を主張する基礎であった。残念ながら青年ビアトリスは両者を総合して展開することを試みていないが、彼女の価値理論の研究は、個人間の欲望の需要と能力の供給との社会的結合関係を実体ないし源泉とする、形態的三層構造を有する商品価値論、商品形態論を指し示すのである。

謝辞：本研究に平成26年度科学研究費補助金（「ビアトリス・ウエップの福祉経済学の研究：フェミニズム・福祉国家論・社会経済学」（課題番号25380260））を受けたことを記して感謝する。

参考文献

- 1) Webb, B., (Potter, B.), *The Economic Theory of Karl Marx*, PASSFIELD Collection, 7/1/5, 1887
- 2) Webb, B., *My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co., New York, 1926. Paperback edition published by the Press Syndicate of the University of Cambridge, 1979
- 3) Webb, B., *On the Nature of Economic Science*, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value), in Webb, B., *My Apprenticeship*, as Appendix D, pp.422-430, Longmans and Green Company, 1926
- 4) Webb, B., (Potter, B.), *The History of English Economics*, PASSFIELD Collection, 7/1/3, 1886
- 5) 佐藤公俊, 「ビアトリス・ポッターの1886年論文 *The History of English Economics* の原稿のトランスクリプションと解説 (1)」, 『長岡高等専門学校研究紀要』第46巻, 2010
- 6) 佐藤公俊, 「ビアトリス・ポッターの1886年論文 *The History of English Economics* の原稿のトランスクリプションと解説 (2)」, 『長岡高等専門学校研究紀要』第48巻, 2012
- 7) 佐藤公俊: 「ビアトリス・ウエップの経済学の方法」、経済理論学会第61回大会ホームページ：<http://www.isc.senshu-u.ac.jp/~the0698/jspe61.html>
- 8) 佐藤公俊「ビアトリス・ポッター（・ウエップ）の経済学研究：1886年の独立— “The History of English Economics” 草稿へのハーバート・スペンサーからの批判への反論—」, 社会理論学会編『社会理論研究』第15号, 2014年11月出版予定
- 9) Cole G.D.H., BEATRICE WEBB AS ECONOMIST, *Economic Journal*, 1943 Dec
- 10) McBriar, A.M., *Fabian Socialism and English Poitics 1884-1918*, Cambridge at The University Press, 1962
- 11) トムソン, D.R., ポーキングホーン, B., 『女性経済学者群像』, お茶の水書房
- 12) 大前眞, 「ビアトリス・ポッター(ウエップ)と政治経済学」, 『経済学論叢』, 45(3), 同志社大学経済学会, 1994. 55-69
- 13) 佐藤博樹, 「ウエップ社会理論の再構成—テクノクラート・ウエップからモラリスト・ウエップへ」, 『日本労働協会雑誌 / 日本労働協会 編』, 22 (9), 1980.09, p53~64
- 14) 江里口拓, 「福祉国家形成期における社会理論の一面—ビアトリス・ウエップの「応用社会学」とスペンサー」, 『愛知県立大学文学部論集』(社会福祉学科編), 第56号, 2007 pp.1-25
- 15) マーシャル, 『経済学論文集』, 岩波ブックサービスセンター, 1991年 (Marshall, A., *The Present Position of Economics*, 1885. In *Collected Essays 1872-1917*, OVERSTONE PRESS, 1997)
- 16) Webb, B., *Beatrice Webb's Diaries*, <http://digital.library.lse.ac.uk/collections/webb>
- 17) 佐藤公俊, 「ビアトリス・ポッター・ウエップ」『経済科学の本性について』の紹介と翻訳, 『長岡高等専門学校研究紀要』, 第44巻, 第1号, 2008

(2014. 10. 3 受付)